国際貢献パワー おかやまは動く

アジア医師連絡協議会
AMDAからの報告

シリーズ企画 No.1

AMDA（アムダ）。岡山に本部を置くアジア医師連絡協議会の略称。内戦や災害による難民、被災民への救援医療を世界で展開する岡山の務るNGOだ。シリーズ企画「国際貢献パワー おかやまは動く―AMDAからの報告」は、その活動や岡山での支援など紹介。日本の国際貢献のあり方が問われる中で、草の根の「地球サイズのボランティア」を考える。（文中敬称略）

100万人襲う飢え、コレラ
道端で力つき―死の嵐
「いのち 安すぎる」

子供を助けて／難民の母親がAMDAの医師をすがるように見つめる

機関銃の連射音が、ザイール・ゴマの夜をつんざいた。

宿舎のすぐ近く。ザイール兵の発砲は一時間も続いた。宿舎に乱入してきたら？逃げるか、いや、宿舎のほうが安全か。

岡山市の看護婦山田綠（さ）＝医療法人クスカ会＝の難民救援は、恐怖の体験から始まった。

＊＊＊

AMDAが94年から続けるルワンダ難民救援医療プロジェクト。山田は難民が逃げ込んだ隣国・ゴマ近郊のキブンバキャンプに派遣された。

内戦の惨苦の中での活動、困難は覚悟していた。だが現実は想像を超えた。

山田は日記にこう記した。

94年8月9日　ゴマ市は百万人以上の難民の足跡があった。二週間前は死体だらけだったと聞く。ゾクッとした。

10日　水も電気もなく、昨日のコーヒーも飲めなかった。ゴマ市から40キロの難民キャンプに行った。道路すべてが死体だらけだったと聞かされ、またショックを受けた。

11日　借家のすぐ近くでザイールが発砲した。鳥肌だらけになり、押し入れやトイレに逃げ込んだ。

＊＊＊

赤道直下のルワンダは、コーヒーやバナナなどがとれ、本来なら飢えなど無縁の国である。

それが94年4月、部族対立の内戦が再燃、大虐殺で五十万人以上が犠牲になった。二百万人が子供の手を引き、重い荷物を抱えて何日も歩いてザイールなどに逃げ込み、飢えと病気に苦しむ難民となった。

AMDAの行動は早かった。5月には、岡山から医師や事務局員らがルワンダ入りして病院再建にあたり、ザイールでも難民救援が手掛けられた。

＊＊＊

山田は、医師で米国留学中に駆け付けた渋谷優司さんとキブンバキャンプに診療所のテント張りを急ぐ。雨。死臭。山をなす人糞の中での作業だった。

山田が敗血症を発症した。風邪と悪寒を伴う状況に打ちのめされたショックからのダウン。「自分の体のコントロールもできない看護師に何ができる」。渋谷のしったに、山田は唇をかんだ。

8月17日。難民キャンプでAMDAの診療が始まる。キャンプではコレラで一日十人も死んだと言う。赤痢に気管支炎、肺炎、マラリアもはやっていた。

診療所には一日三百人以上も押し寄せた。山田は通訳を介して症状を聞き、便を調べ、薬を出した。夏と言っても朝晩は冷える。それに栄養失調。難民は血便を出し、「ビスケットを」「毛布を」と訴えた。

注射液もミルクも、何もかも不足している。懸命の医療活動

テントで診療　難民が列
赤ちゃんにアムダと命名

荒野に立つ難民の子供。その目は何を訴えているのだろうか

診療所を子供たちがのぞき、ムラオイ（こんにちは）と話しかけてくる。逆境の中の純真な笑顔。山田らの心がなごむ。

8月28日。疲れ切った難民女性が診療所に駆け込んだ。待つこと一時間、ベビーが元気に誕生。「死」の嵐の中での「新しい生命」。キャンプがわき、現地スタッフが拍手した。「この子をアムダと名付けよう」。

その日、母親はフランスパンを抱り締め、帰っていった。

＊＊＊

10月にゴマ入りしたAMDAの医師鈴田裕子（ゆうこ）＝岡山県東取手市＝は11月3日朝、スタッフといつものようにトラックでキブンバキャンプに入った。

コレラは下火となっていた。だがルワンダ旧政府軍の反政府ゲリラもうろつき、不穏な空気が流れていたその時。事件は起きた。

難民救援隊人が鈴田らを止め、車を叩き運転手を引きずり降ろす。目が血走り「降りろ」と叫ぶ。銃を持っているかも知れない。鈴田は救援を振り絞り「生きて帰りたい」と祈りながら車から降りた。

車を奪った難民らは勝ちどきをあげ去った。鈴田らが難民救援でゴマにいた自衛隊員に救出されたのは、二時間後だった。

AMDAの車に乗る難民

奪われた車はルワンダ人の所有で、無償の寄贈だった。事件はNGOへの反感ではなかった。AMDAの活動は続く。

＊＊＊

AMDAは一年半のルワンダ難民救援で派遣した医師、看護師は四十六人に及ぶ。インドなどそれぞれでの活動は現地支部があったがルワンダにはない。情報が部局、安全の保障もなかった。「森羅万象のパターン、不安の中でとにかく戦った」と医師でAMDA代表の看護婦（さ）＝岡山市＝。この難民救援はAMDAの飛躍につながり、鈴田らの救出の教訓はAMDAを強く印象づけることになった。

＊＊＊

今年10月、AMDAの看護婦岩田和子（さ）＝岡山市＝はザイール・カレベ難民キャンプの日本人看護婦から手紙が届いた。難民らがバレーボールの練習をしていると言う。

岩田は、そのカレベで活動した。「風やにおいまで思い出せる」と懐かしむ。本国にまだ帰れず、安全でないと言う。難民らが反感になっていることを言う。

山田と岩田は今、同じ老人保健施設でお年寄りを介護している。「ボランティアの動機？そんなに深く考えていないし……。「（帰ってから）少しは優しい目で接するようになったかな」。二人はくすっと笑う。

鈴田も、家民で忙しく診療しながら言う。「人のために体を動かしてみたい。ただ、それだけのことですよ」。

＊＊＊

写真はいずれもルワンダ難民キャンプで。昨年撮影。

ルワンダ内戦

ルワンダは面積約2・6万平方キロで、四国の約1・4倍。人口約七百五十万人（93年）。少数派（1割）のツチ族が多数派のフツ族（9割）を政治的・経済的に長年支配してきたことで、部族間の抗争が度々発生。62年のベルギーからの独立によりフツ族が政権を取ったが、その後も政情は安定せず、ウガンダに避難していたツチ族を主体とするルワンダ愛国戦線が90年にルワンダへの武力侵攻を開始、内戦が勃発した。難民の帰国はいまだに実現していない。

――〜――

今夜、神のお告げのある人が増えているだろう。「国によって命の値段がちがう」。

山田の日記は続く。

「今夜、神のお告げのある人が増えているだろう。「国によって命の値段がちがう」。

国際貢献パワー おかやまは動く

アジア医師連絡協議会
AMDAからの報告

シリーズ企画 No.1

人間なのだから お互い助け合う―それが「平和」に

AMDA。本部は岡山市街地の西、国道180号沿いの個人医院（同市福渕）に構える。

そうかくない一室。パソコンと電話が数台並ぶだけだが活気に満ち、英文で綴くファックスが世界と向きあっていることをうかがわす。

スタッフが、「AMDA活動年表」をつくっている。ミャンマー、カンボジア、神戸、サハリン…84年のAMDA誕生以来、手掛けた医療援助は計二十五、海外支部は16カ国に及ぶ。

国際貢献フォーラムやセミナーも次々に開催、A4判の年表はもう四枚目が終わりかけだ。

世界に多くの医療NGOがある中で、AMDAの真骨頂は緊急医療援助。国レベルの活動は政府間の調整に手間取る。急を要する救援は、NGOが動きやすい」というゆえだ。だからの"七十二時間内の活動開始"を標榜する。

内戦に地域紛争、地震、洪水…海外支部や岡山、全国からAMDAの医師や看護婦らが飛び出していく。派遣は独自判断だったり、国連からの要請だったりする。

岡山の本部では専従スタッフ（現在11人）が現地の情報収集、薬や医療機器などの手配に追われる。ボランティアも多くかけつけ、手伝い。「本部での裏方支援。だれでもできる仕事がある」と、事務局長の近藤祐次（ゆうじ）。その時ボランティアにもらった人の応役に立てる充実感が浮かぶ。

＊＊＊

「内戦のカンボジア難民キャンプで何もできなかった」。菅波はその「くやしさ」が16年たった今も脳裏に焼き付いている。

79年冬、西日本医学生アジア連絡協議会（AMDA）の前身）の医師、菅波茂は、医学生二人とカンボジア難民キャンプへ駆けつけたが、既に欧米のNGOが国連と連携して救援活動を展開、キャンプに根を張っていた。岡山からいきなり飛び込んでも、活動の場はなかった。

「国際救援活動は善意だけでは空回りする。情報収集や受け皿の拠点が必要だ」。わずか一週間でカンボジア難民キャンプから帰国した菅波は、アジアの医師や医学生らに呼び掛け、医療救援のネットワークづくりに取組んだ。

今年、国連NGOに認定されたAMDAの原点は、そうした菅波らの苦い体験にあった。

＊＊＊

活動は「緊急救援」だけではない。マニラのスラム、ネパールの無医村などで地域医療支援を長期的に展開。貧困などの問題から足りない医療を受けられない在日の外国人も視野に入れ、東京と大阪に「国際医療情報センター」を開いている。

たった570円で栄養失調の子供たちが救えるというのに

ルワンダ難民の子供たち。明るい笑顔は逆境に負けない

「三百七十円あれば一人の栄養失調の子供が救えます。こう書かれた本に出会ったのは、文化祭の展示を考えていた時でした」。今年11月の岡山県内学校

井輪大会（岡山市の女子生徒）は、こう切り出した。

生徒らはボランティアに参加しようとAMDAを訪れ、ルワンダ難民について聞いた。ところが、学校の給食だけより、残菜の多い日は金額にして八万円以上に上る、とあった。

「私たちは、毎日昼八時上の命の糧を捨てていることになる」。井輪はこう嘆き、「ルワンダの人々の生活を見直すと、人間らしく生きるには多くの支援が必要なことがわかる」。「募金は、この大切なことに気づかせてくれた」と結んだ。

AMDAは、いろいろな「善意」が全国から寄せられている。お金や物であったり、労働奉仕であったりする。小銭いとか年金をためて子供やお年寄りからだったり、企業や団体からのまとまった寄付だったりする。

海外に医師を派遣し、救援物資を送る。相当な額にのぼるAMDAの運営費は、こうした「善意」と国連、外務省、郵政省などからの助成・補助金、それに会員約八百五十人の会費（医師二万五千円、一般七千五百円、学生五千円、法人三万円、賛助二千円＝いずれも年額）でまかなわれている。

「寄せられた"善意"は、難民キャンプでは注射液や薬などに使われる。AMDAを通じて人道援助に底辺つながっているわけです」と近藤事務局長。

AMDAが誕生して14年。岡山で、全国で、「草の根の国際貢献」の輪が広がりつつある。

いたたまれない心の叫び

清心中学校 清心女子高校 校長 高木 貞子

高木 校長

「感性」を大切にしたいと、いつも考えています。

情報化時代です。悪まれないら、災害や戦争などで被害を受けた人から、悲痛な叫が発信されてきます。

それを感性で受け止め、思いやる。「いたたまれない」という心の叫びが自分自身に沸いてくるのではないでしょうか。

本校では女性の視点を生かしたボランティアに取り組んでいます。福祉施設を訪問して触れ合う、地域の清掃、ユニセフ募金に協力、チャリティー演奏会…

人間なのだから お互い助け合う―それが「平和」に

事務局にはボランティアの方が来て下さり、また、活動費に充てるようにと温かい寄付を頂いたり励ましの言葉が寄せられた。私たちは皆さんに感謝とともに、さらに幅広い活動をしたいと意欲をもっています。

AMDA事務局
6・264・7750

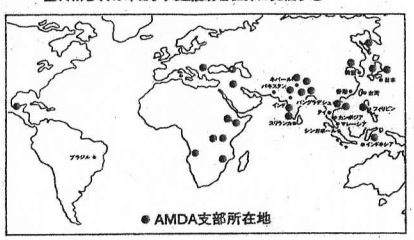
〈企画・制作 山陽新聞社広告局〉

このシリーズについてのご意見、ご感想を左記にお寄せください。
〒700岡山市柳町2-1-23 山陽新聞社広告局
「アムダ係」

▲AMDAの本部。人道援助を世界に発信する

AMDAプロジェクト

- インド連邦カルナタカ州無医村地区巡回診療
- ネパール王国ビルスタ村地域保健医療
- 在日外国人医療
- クルド湾岸戦争被災民救援
- ピナツボ火山噴火被災民救援医療
- エチオピア・チグレ州難民救援医療
- バングラデシュ・ミャンマー難民緊急医療
- ネパール国内プーター難民緊急医療
- カンボジア地域医療
- カンボジア精神保健
- ソマリア難民緊急援助医療
- ネパール・バングラデシュ大洪水被災民緊急救援医療
- インド西部大震災民緊急救援リハビリテーション
- モザンビーク帰還避難民
- タンコット村眼科医療&母子保健
- 旧ユーゴスラビア日本緊急救援NGOグループ援助
- ルワンダ難民緊急救援
- ルワンダ国内病院再建
- 阪神大震災緊急救援
- チェチェン難民救援
- サハリン大震災緊急救援
- アンゴラ帰還難民プロジェクト
- 朝鮮民主主義人民共和国大洪水救援
- インドネシア大震災緊急救援
- メキシコ大震災緊急救援


ブラジル
ルワンダ
ソマリア
ケニア
ルワンダ
ケニア
ルワンダ
ケニア
ルワンダ